

会派研修会実施報告書

会派の研修における結果について、下記のとおり報告します。

令和 8 年 8 月 4 日

光市議会議員 森戸 芳史 様

光市議会 会派「こう志会」 代表 中本 和行
議員 萬谷 竹彦
議員 林 節子
議員 中村 譲
議員 西村慎太郎
議員 清水 祐希
議員 新見 浩明

記

1 日時 令和 8 年 7 月 3 日（金）～4 日（土）

2 場所

（1）東京都立川市

（2）学校法人みんなの広場 富士幼稚園

3 テーマ

<行政視察>

（1）立川市における委員会のオンライン出席制度について（東京都立川市）

<教育施設視察>

（1）教育について（学校法人みんなの広場 富士幼稚園）

4 視察結果 別紙のとおり

別紙 こう志会視察報告書

日 時	令和 8 年 7 月 3 日（金） 14 時 30 分～15 時 30 分		
調査地名	東京都立川市		
テ ー マ	委員会のオンライン出席制度について		
同行者	仲小路議員		
対応者	立川市	議会事務局 次長	竹内 佳浩 議会事務局 議事係長 中村 孝史

概要	令和 2 年、新型コロナウイルス対策として総務省が委員会のオンライン会議を容認したことを契機に、立川市議会では委員会のオンライン出席制度の検討が始まった。当初は一般質問の文書化や委員会質疑時間の短縮で対応していたが、濃厚接触による出席制限が課題となり、行政手続きのオンライン化を求める声が高まった。 令和 4 年 4 月、議会運営委員会で感染症対策を主目的にオンライン出席の検討を開始。同年 6 月の選挙後に再開し、出産を控えた女性議員の状況を踏まえ、男性議員から対象に「出産・育児」を加える提案がなされた。最終的に感染症・災害に加え、出産・育児も対象とすることで合意。有志の会の議論を経て介護も含める方針で「とにかくやってみよう」とまとまった。 制度の趣旨は、やむを得ない事情で参集困難な場合に委員の発言機会を確保すること。義務化はせず、希望する議員が活用可能。現時点では委員会のみ対象で、年間実績は 1 件。出産前 6 週間、出産後 8 週間の欠席事由を別途規定し、オンライン出席の圧力とならないよう配慮している（病気は対象外）。		
内容	●立川市の概要 ○面積：24.36 平方キロメートル ○人口：187,818 人（令和 8 年 4 月 1 日現在） ○高齢化率：24.7%（全国平均 29.3% 令和 6 年 9 月 15 日現在） ○世帯数：99,470 戸		
	1.規定（例規）整備・運用ルールについて		
	他議会事例（都道府県議会デジタル化専門委員会資料、大阪府、鳥取県、三重県）を参考に条例・要項を作成した。会議規則を改正し、出席委員にオンライン出席委員を含む旨を明記、評決に関してもオンライン出席委員が参加可能とする但し書きを追加した。 実施要項では、オンライン出席希望者は開催日前日正午までに委員長へ申請書を提出することとし、委員長は通信状況悪化等の際に当該委員を離席とみなす権限を持つ。秩序を乱す行為があれば音声・映像の接続を切断できる。 出席状況の本人確認は前日・当日に映像と音声で行い、両方確認できた場合に出席扱いとする。採決時も映像＋音声で確認し、音声で異議の有無を再確認する。通信障害発生時は原則退席扱いだが、発言中は委員長判断で休憩を挟む場合がある。		
	2.実施環境・機器構成・費用と運用工夫について		
議員には以前から iPad が配付されており、資料閲覧との併用のため追加機器は各自準備する。事務局側で Web 会議用 PC2 台、カメラ、モニター、デジタルミキサー、レベルコンバーター等を整備し、工事費込み約 286,000 円。執行部保有機器を活用し事務局職員が準備、運用している。			

Wi-Fi は議会関係会議室に整備（庁舎全館ではない）。通信状況に不具合が生じることを想定し、その際は代替連絡手段は携帯電話とする。1 台のカメラで委員長、もう 1 台で委員会室全体を映し、オンライン出席者が双方を確認できるようにしている。

3.体験会・運用改善について

各常任委員会で体験会を実施しアイデアを集約。育児中の委員の急な離席を考慮し、離席の意思表示にはチャット機能を活用することとしている。委員長は冒頭にオンライン出席者の発言意向を確認し、発言順は「随時」対応としている。

4.実施状況・結果・導入効果について

令和 5 年 6 月、厚生産業委員会で出産した委員がオンライン出席（多摩地域で初）。委員会室にオンライン出席委員の顔を映す大型モニターを設置し、委員長席では委員会室全体・委員長席・オンライン出席者の 3 映像を確認しながら進行した。

オンライン出席委員の所感「委員会室の雰囲気は少し掴みにくいが、質疑のやりづらは特段なし」。他の委員・説明員も問題なしとの感想で、委員長は事務局サポートによりスムーズに進行できたとしている。発言機会の確保に一定の効果があり、災害時・感染症流行時の備えとして有効との認識だが、育児・介護による欠席の大幅減や若年層の議員就任促進効果は未確認である。

5.課題認識・未決事項について

オンライン出席者は休憩中のオフライン協議には参加が困難（配信マイクをオフにするため）で、現状対応は見送られている。通信途絶で回復見込みがない場合はオンライン出席不可とする運用。

本人確認の厳格化も課題で、顔・声の変装技術の進化によるリスクを踏まえ、性善説依存の低減が求められる。準備に手間がかかり運営効率化は限定的で、チャットの継続運用や発言管理（挙手機能、ピン留め）の最適化も検討の余地がある。介護を認める具体的判断基準の明確化も未了である。



質問

Q1. 導入の契機は何か

A1. 令和 2 年の新型コロナウイルス感染症対策として総務省が委員会のオンライン会議を容認したことが契機。当初は一般質問の文書化等で対応していたが、出席制限の課題を受け令和 4 年度から本格検討を開始した。

Q2. 対象事由はどのように設定しているか

A2. 感染症・災害に加え、出産・育児、介護も対象とした。出産前 6 週間・出産後 8 週間は別途欠席事由とし、オンライン出席への圧力とならないよう配慮している。病気は対象外である。

Q3. 整備費用はいくらか

A3. Web 会議用 PC2 台・カメラ・モニター・デジタルミキサー・レベルコンバーター等の整備で工事費込み約 286,000 円。執行部保有機器を活用し事務局が準備、運用した。

Q4. 本人確認や採決はどのように行うか

A4. 前日・当日に映像と音声で本人・出席確認を行い、採決時も映像と音声で異議の有無を確認する。通信障害時は原則退席扱いとするが、発言中は委員長判断で休憩を挟む場合がある。

Q5. 導入実績と効果は

A5. 令和5年6月、厚生産業委員会で出席した委員がオンライン出席（多摩地域で初）。発言機会の確保に一定の効果があり、災害・感染症流行時の備えとして有効との認識だが、育児・介護による欠席の大幅減や若年層の議員就任促進効果は未確認である。

Q6. 主な課題は何か

A6. 本人確認の厳格化（なりすまし対策）、通信障害時の扱い基準の明文化、休憩中のオフライン協議への参加方法、介護適用の具体的判断基準の策定などが未了である。

Q7. 今後の予定は

A7. 2026年12月末までに委員会オンライン運用の評価報告を作成予定。本人確認手順の強化、通信障害時の扱い基準の明文化、発言管理ルールのマニュアル化、市民向け周知の強化、介護適用の判断基準の策定等に取り組む。



所感 中本和行 議員

立川市議会では、オンライン会議の導入、検討経過についての説明を頂き先進的な取り組みでした。映像と音声による送受信しながら相手の状況を認識しながら通話することができ、特に、委員会の出席ができる制度で、デジタル化が進み、感染症、災害とか出産、育児等多様な事情の中で、議員が活動できる仕組みづくりが必要であります。

オンライン会議については、通信機器、会議方法、通信障害他、運用面の体制の整備をして、私たちが活動しやすい環境づくりをしながら、検討をする必要性を感じました。

萬谷竹彦 議員

条例改正により、委員会の オンライン出席 が可能となった立川市議会。議会を前にオンライン出席の方法を学ぶ研修が委員会単位で行われたそうです。新型コロナ感染拡大などで、オンライン出席解禁の必要性が指摘されてきましたが、議員の妊娠をきっかけに、感染拡大や災害などの非常時だけでなく出産・子育て・介護などのやむを得ない事情がある場合にも、オンライン出席ができるようにしよう、ということになりました。またバリアフリー化を進めることで、多様な市民の要望に応えうる、より多様性のある議会にしていくこともできるのではないかとも思いました。今後は、光市においてもオンライン会議の積極的な活用により、移動時間や事務コストの削減を図るとともに、創出した時間を市民サービスの向上へ還元する仕組みづくりを検討していく必要があるとも感じました。地方自治法の規定もあって、本会議は今後もオンライ

ンでの質疑や採決は認められませんが、そうしたことも可能となるよう、市議会から働きかけていくことも必要かもしれません。今後は、本市においてもオンライン会議の積極的な活用により、移動時間や事務コストの削減を図るとともに、創出した時間を市民サービスの向上へ還元する仕組みづくりを検討していく必要があると感じました。

林節子 議員

今回の視察で、印象に残ったのが、オンライン 出席の検討の際、男性議員 から 出産 育児 を加えるという声が上がったことである。私たちの頃は男性が育児を手伝うことが少なかったため このような声を上げて嬉しく思う。準備から運用までよく計画を立てて考えられている。iPad を使える議員も多くなかったはず。事務局の努力は素晴らしいと感じた。

中村譲 議員

立川市では、災害時や感染症の流行など、議員が参集できない状況に備え、委員会をオンラインで開催できる環境を整備していました。また、非常時だけでなく、出産や育児などの事情により登庁が困難な場合にも活用できる仕組みとして運用されている点が印象に残りました。実際に一度オンラインで委員会を開催した実績があり、委員会の審議自体は特に問題なく進められたとのことでした。一方で、休憩中の協議や委員同士、執行部との細かな打ち合わせなど、対面であれば自然に行える意思疎通については課題が残るとの説明もありました。私は、オンラインは対面の委員会に代わるものではなく、非常時ややむを得ない事情がある場合でも議会機能を維持するための有効な手段であると感じました。本市においても、対面の良さを大切にしながら、多様な状況に対応できる議会運営の一つとして導入を検討する価値があると感じました。

西村慎太郎 議員

今回の立川市の視察において感じたのは、制度を「完璧に仕上げてから始める」のではなく、「まずやってみて、運用しながら改善する」という姿勢です。実際、各常任委員会で体験会を実施してアイデアを集約し、育児中の委員の急な離席にはチャット機能を活用するなど、現場の声を反映しながら柔軟に運用ルールを磨き上げてきた経緯がうかがえました。感染症や災害への備えはもちろん、出産・育児・介護といった事情を抱える議員が発言機会を失わない仕組みづくりは、これからの議会のあり方を考える上で避けて通れないテーマだと感じます。まずは対象事由と基本的な運用ルールを固めたうえで小さく始め、体験会等を通じて改善を重ねていくアプローチは、光市議会でも十分に応用可能だと考えます。

清水祐希 議員

今回の視察では、立川市議会が単なるコロナ禍への対応にとどまらず、出産・育児や介護・看護など多様な事情を抱える議員の議会活動を保障する観点から、委員会のオンライン出席制度を整備してきた点が特に印象に残った。また、会議規則や実施要項を細かく整備し、実際の運用を踏まえながら改善を重ねている姿勢も大変参考になった。一方で、準備や運営の負担、通信トラブルへの対応など課題もあることから、制度導入には十分な検討が必要である。光市においても、多様な議員活動を支える環境整備や議会 DX の推進という観点から、将来的な導入の可能性について研究を進める必要があると感じた。

新見浩明 議員

今回の視察では、オンライン委員会だけでなく、導入に至るまでの丁寧な検討過程が特に印象に残りました。立川市では、国の通知を受けて直ちに制度化するのではなく、議会運営委員会で議論を重ね、会議規則や実施要綱を整備し、実証や運用を通じて課題を一つずつ整理しながら制度を構築されていました。新たな仕組みを導入する際には、技術面だけでなく、議員間の合意形成や実務に即したルールづくりが不可欠であることを改めて認識しました。本市においても、オンライン化を目的とするのではなく、災害や育児・介護など多様な状況に対応できる持続可能な議会運営の一つの手段として捉え、十分な議論と試行を重ねながら、

本市に適した制度を検討していくことが重要であると感じました。

以上

日 時	令和 8 年 7 月 4 日（土） 10 時 00 分～10 時 40 分
場 所	東京都立川市 ふじようちえん（学校法人 みんなのひろば）
テ ー マ	教育について（ふじようちえんの教育理念と施設紹介）
同行者	仲小路議員
対応者	ふじようちえん 園長 加藤積一

概要	【ふじようちえんについて】 ふじようちえんは東京都立川市上砂町に位置する、学校法人みんなのひろばが運営する幼稚園である。富士幼稚園（満 3～5 歳、約 660 名）と 4 つの保育園を合わせて法人全体で約 1,100 名の子どもが在籍し、職員は約 210 名。2007 年竣工の園舎は建築家・手塚貴晴及び手塚由比夫妻（手塚建築研究所）と池田昌弘氏（構造）の設計、竹中工務店の施工によるもので、外周約 183m・内周約 108m の楕円形をしたドーナツ状の屋根（ウッドデッキ）が特徴。建て替え前からあったケヤキの大木 3 本を屋根に貫通させて保存している。日本建築学会賞（作品賞）、キッズデザイン賞金賞（経済産業大臣賞）、グッドデザイン賞インタラクシオンデザイン賞など多数の賞を受賞している。
内容	1.教育理念 理念の核は「幸せな未来を作る教育」であり、「思いやりがあって自立した子ども」の育成をゴールとする。「見て・感じて・考えて・行動する」という体験のサイクルを子ども自身が回すことを最重要視し、体験は教えられるものではなく遊びの中で自ら掴むものと位置づける。「先生がいて子どもがいて教える」という約 150 年続く教育モデルからの変革の必要性を指摘している。 2.建築・デザインと教育的意図 建築を「子どもが育つための道具」と位置づけ、ロゴデザインを佐藤可士和氏、建築を手塚夫妻が担当。「状況をデザインする」という思想に基づき環境を構築している。京都大学・川上教授が提唱する「不便益（不便による利益）」の概念を導入し、意図的に不整地とした園庭で転倒・よろけの体験を通じてバランス感覚・体幹・注意力を育て、板一枚の仕切りで実社会に近い集中力を養い、隙間のある戸で「きちんと閉める」という自己規律を促し、流し台のない水場で水を出しっぱなしにしない自己制御を育てている。 3.モンテッソーリ教育と具体的活動 モンテッソーリ教育を基本とした自由保育を実践。保育室スマイルエッグスでは 0 歳から月齢に合った教具に触れる環境を整備。砂場での石並べ等の遊びを通じて秩序感・達成感を育て、砂場の石拾いでは「取れた子は取れなかった子に分ける」という唯一のルールで欲を肯定しつつ他者配慮の心を育てる。室内では上履きを使わず足裏の筋肉と土踏まずの形成を促す「足育」にも取り組み、園児の歩数は一般的な幼稚園の 3 倍というデータもある。



所感	4.食育と英語教育 自園農園「スマイルファーム」で無農薬野菜を栽培し給食に使用、全園児が芋掘り等の収穫体験を実施。給食は和食中心・化学調味料不使用・無添加を基本とする。英語教育では「日本のことを英語できちんと話せる日本人」の育成を目指し、4歳から小学6年まで続く独自カリキュラムを導入している。
	5.育児観・保護者への姿勢 現代の「失敗しないハウツー」偏重に疑問を呈し、幼児期にはハウツーを伝えすぎず、子ども自身が「何をやりたいか（To do）」を見つけることを重視する。保護者向け配布資料は写真中心で文章を減らし、多忙な保護者が直感的に理解できるよう配慮している。
	中本和行 議員 便利な社会になり何不由なく生活でき、子育て支援、教育環境も整備されてのいる社会環境の中で、ふじ幼稚園では園舎設計と保育において、保育士は、園児の行動を見ながら支援する。自由に走り、遊びの中で自分が考えて、工夫する力、考える力、自分たちで育つ力を育むことで大きな効果が出ている。 園舎は、壁や仕切りを最小限に抑えている。園児は自然に触れて一人一人の個性を伸ばす。「子供たちを少し困らせる」ことが大事と言う保育理念を共有していることに改めて感じました。 視察を通じて、園児が安心して学べる施設の環境、子供の主体性を考えた保育環境が重要だということを強く感じました。
	萬谷竹彦 議員 園舎および保育環境の特徴や工夫を把握し、これからの保育環境づくりの参考とするため視察をしました。主に園舎の構造や保育環境、園庭の活用状況、子どもたちの生活動線、安全対策について見学し、また、施設設計が日常の保育活動にどのように活かされているかについて説明を受けました。そして、わざと不便な環境づくりについても、感銘を受けました。また、園舎は円形の構造となっており、保育室から園庭や共有スペースへの移動が円滑で、子どもたちが自由に活動しやすい設計となっていました。屋上には広い遊び場が整備されており、高低差を活かした遊びや開放感のある空間は、子どもの挑戦する気持ちや運動能力の育成につながる工夫として印象に残りました。この園舎は、子どもの主体性や豊かな感性を育むために綿密に設計されていることを強く感じ、子どもたちの教育についても、最も重要なものだと感じました。
	林節子 議員 ふじようちえんは、モンテッソーリ教育という自ら育つを引き出すプログラムを実践しています。 私の孫も幼稚園の頃 モンテッソーリ教育を受けました。自分で遊び方を工夫したり、馬がいるところで生き物を大切に作る心が育ちます。野菜をすることで 苦手なものを食べられるといった、自然豊かな環境で原点に戻った学びがあると感じました。 中村譲 議員 ふじようちえんでは、モンテッソーリ教育を基本とし、子どもの主体性や自主性を育む保育が実践されていました。また、園内ではポニーとの触れ合いやカブトムシなどの昆虫の飼育、畑で育てたさまざまな野菜の収穫など、自然と触れ合いながら命や食の大切さを学べる環境が整えられており、子どもの成長を支える多くの工夫が見られました。一方で、私が最も関心を持ったのは、このような環境で育った子どもたちが、小学校やその先の人生でどのように成長しているのかという点です。幼児期に培われた主体性や考える力が、その後も生かされているのであれば、大変意義のある教育だと感じます。本市においても、幼児教育とその後の成長とのつながりを意識しながら、子どもたちの豊かな学びを支える環境づくりを進めていくことが大切であると感じました。

西村慎太郎 議員

ふじようちえんは、建築家・手塚貴晴＋手塚由比夫妻が設計した楕円形のドーナツ状園舎で知られ、日本建築学会賞をはじめ数々の賞を受賞している。しかし今回の視察で学んだのは、その建築が単なるデザインではなく「子どもが育つための道具」として機能している点である。また、「不便益」という考え方も外せない考えである。この概念を教育環境に取り入れ、あえて便利にしすぎない園庭や仕切り、水場を設計することで、子どもの工夫・自己制御・問題解決能力を育てているという。安全・利便性の追求と対立するのではなく、発達段階に応じた適度な負荷を意図的に設計するという発想は、光市の子育て環境・遊び場整備を考える上でも新たな視点になると感じた。

清水祐希 議員

今回の視察では、「教育は子どもに教えるものではなく、子ども自身が体験を通じて学ぶもの」という考え方が施設全体に貫かれていることを強く感じた。

特に印象に残ったのは、「不便益」という考え方である。安全性や利便性を追求することは大切だが、同園ではあえて適度なリスクや不便さを取り入れ、子どもが失敗や挑戦を経験する中で、自ら考え判断する力を育む教育を実践していた。

また、園舎やデザインも見た目を重視したものではなく、「子どもの成長に必要な環境」を実現するための手段として設計されており、教育理念と施設づくりが一体となっている点が非常に印象的であった。

今回の視察を通じ、子どもの主体性を育む環境づくりや体験を重視する教育の重要性を改めて認識した。今後の光市の子育て・教育施策を考える上でも、大変参考となる視察であった。

新見浩明 議員

今回の視察では、特色ある教育内容以上に、「子どもが自ら考え、行動できる環境づくり」が徹底されている点が印象に残りました。モンテッソーリ教育を基盤としながら、園舎や園庭、自然環境、さらには地域との関わりまでを教育資源として活用し、子どもの主体性を引き出す工夫が随所に見られました。また、季節ごとの体験活動や農業体験、動物との触れ合いなど、実体験を重視した保育は、知識の習得だけでなく、探究心や協調性を育む上でも大きな効果があると感じました。行政としても、施設整備だけでなく、地域資源や人材を生かした保育・幼児教育を支える視点が重要であり、本市においても、子どもが主体的に学び育つ環境づくりを進める上で参考となる視察でした。

以上